

空飛ぶ豚、タミフル、養豚「工場」(1)

Flying Pigs, Tamiflu and Factory Farms



F・ウィリアム・イングドール

(翻訳：為清勝彦)

By F. William Engdahl

(Japanese translation by Katsuhiko Tamekiyo)

2009年4月29日

われらが信頼する世界のマスコミが報道していることを信じるとすれば、我々は今、新型の致死ウイルスH1N1（豚インフル）の世界的大流行の寸前にいる。ニュースによると、この致死インフルエンザの発生は、最初にメキシコで発見された。それから数日して、感染力の強い殺人「豚ウイルス」は人間への感染を拡大してメキシコで恐らく150人もの人々を殺し、さらに人間から人間への感染も拡大していると信じられている。刻一刻と、カナダからスペインまで、さらに地域を拡大しながら症例が報告されている。ただ一つだけ間違いを指摘させてもらえば、この話は、嘘と、誇大宣伝と、メキシコの病死者の本当の原因の隠蔽に基づいている。

結論ありきの豚フルエンザ

「豚インフルエンザ・ワクチン」という見事な名前（インフルエンザではなく「ワクチン」が問題という意味で）のウェブサイトが憂慮すべき事態を伝えている。「メキシコ・シティは感染症の中心地と思われており、このメキシコ最大の都市では5人に1人がウイルスから自己防衛するためにマスクをつけている。今までのところ、103人の死者が豚インフルが原因とされ、多くの人々が死の瀬戸際にいる不安を抱えている。メキシコの保健省によると更に1,614の症例が確

「認されたそうである」 H1N1 は「人、鳥、豚のインフルエンザ・ウィルスの遺伝子物質を併せ持っている」と説明されている。(引用元) Health Advisory (健康情報) <http://www.swine-flu-vaccine.info/>

世界中の空港で、乗客の体温をスキャンし、正常な体温より高い人を見つけ出し、豚インフルエンザ感染容疑者にする体制が取られている。メキシコへの旅行者はいなくなった。インフルエンザ薬、特にロシュ社のタミフルは数日で爆発的に売れた。人々は死を恐れて豚肉を買わないようになった。WHO (世界保健機関) は、「国際的な懸念を伴う公衆衛生の緊急事態」を宣言した。これは、「生物兵器テロ、流行性・世界的な大流行性の病気、もしくは多くの人々に深刻な危険となる致死的な感染物質や毒物によってもたらされる切迫した疾病の脅威もしくは健康状態の発生」を意味するそうだ。(引用元) Health Advisory (健康情報) <http://www.swine-flu-vaccine.info/>

では、「豚インフル」と称されているものの症状は？というところ、ウィルス学者や公衆衛生の専門家ですら要領を得ない状態である。比較的一般的で特定できない症状だと言う。「あまりにも多くの病気が同じ症状を示すので、困ったことだ」と CNN の取材を受けた医師は言っている。「豚インフルに感染したと医師が判断できるだけの完全な検査手段は今のところない」豚インフルに感染した人は、多くの場合、初期症状で熱が出ると指摘されている。さらに通常の風邪の症状である、くしゃみ、頭痛他に^{めまい}加えて、眩暈、身体の痛み、吐き気もよく見られる症状であるという。いずれも何とも言いようのない一般的な症状だ。

アトランタ州にある米国の CDC (疾病対策予防センター) はウェブサイトで、

豚インフルエンザは、豚で頻繁に発生する A 型インフルエンザ・ウィルスによって惹き起こされた豚の呼吸器系の疾患です。通常、人間には感染しませんが、可能性はあり、実際に発生しています。豚インフルが人から人へ感染した例が報告されていますが、過去においては、この感染は 3 人までに限られており、それ以上持続的に感染していません。

と述べ、それにもかかわらず

CDC は、この豚インフルエンザ A 型 H1N1 に感染力があり、人から人へと伝染すると断定しました。しかし、現時点では、どれだけウィルスが簡単に感染するかは分かっていません。

(引用元) 疾病対策予防センター、「豚インフルエンザとあなた」
http://www.cdc.gov/swineflu/swineflu_you.htm

と付け加えている。

近頃「豚インフルエンザが疑われる症例」という見出しで読者の目を引いてきたマスコミの、いったい何人の記者が各地の衛生当局に二重確認しているのだろうか。確証が取れた H1N1 の症例数と場所、H1N1 で死亡が確認された人数、日付、豚インフルに関連して死亡したり、発病した疑いのある症例数など、基本的な質問をしたのだろうか？

パニックの発生源を探訪して ～若干の既知の事実～

バイオサーベイランス（米国政府と国防総省につながった感染症監視センターであるベラテクト社の一部）によれば、2009年4月6日、メキシコのベラクルズ州ペロテ町ラグロリア（La Gloria）における呼吸器系の病気の発生を受け、現地の衛生当局は警告を発令した。バイオサーベイランスは、

情報源によると、今回の出来事は、子供の場合には気管支肺炎を誘発することもある、急性の呼吸器感染の“奇妙な“発生である”と伝えている。ある地元の住民によると、症状としては熱、ひどい咳、大量の痰^{たん}があるという。衛生当局は先週ラグロリアで治療を要した400の症例を記録した。ラグロリアの人口は3,000人である。当局によると人口の6割（約1,800件）が何らかの影響を受けているという。詳細な時系列情報は示されていないが、地元当局は衛生対策の支援を2月から求めていたと聞いている。

と伝えている。「奇妙な」という表現は、病気の症状ではなく、インフルエンザはメキシコでは通常10月から2月の間に発生するため、この時期に発生するのは奇妙であるという意味だったと、後になって言っている。更に続いて、

小児科の3症例は、いずれも2歳以下だったが、住民は、ウィルス発生が原因で死亡したと訴えている。しかし、衛生当局は子供の死とウィルス発生は直接関係なく、3つの致死症例は独立したもので、相互に関連はないと述べている。

そして、もっとも真実が顔を出しているところ＝主要メディアがほとんど無視してきた部分である。

住民は、近くにある養豚場からの汚染が感染症の原因になったと思っている。グランハスキャロル社（Granjas Carroll）が経営するその養豚場が、空気と水系を汚染し、それが病気の発生をもたらした。住民の話では、同社は病気発生の責任を否定し、インフルエンザのせいにしてしている。しかし、自治体の衛生当局が行った仮の調査では、病原の媒介者^{ベクター}は、豚の排泄物で繁殖するハエの一種であり、病気の発生は養豚場に関係していることが示唆されている。

（引用元）バイオサーベイランス、「メキシコの豚インフルエンザの時系列記録」2009年4月24日
<http://biosurveillance.typepad.com/biosurveillance/2009/04/swine-flu-in-mexico-timeline-of-events.html>

アメリカの「アグリビジネス」は、伝統的な農業を、利益最大化だけを追求するビジネスへと変質させるために、ロックフェラー基金によって1950年代に資金援助され開始されたプロジェクトである。アグリビジネスの出現によって、アメリカの養豚は、生まれてから屠殺^{とぎつ}まで極めて効率化された大量生産の「工業」に変貌した。豚は、ファクトリー・ファームと呼ばれるナチスのダッハウ強制収容所かベルゲン・ベルゼン強制収容所に匹敵する効率性で運営される工業的強制収容所に押し込められた。すべて人工授精で受胎させられ、生まれると定期的に抗生物質を注射される。ぎゅうぎゅう詰め^{とぎつ}の飼育小屋には病気が蔓延しているけれども、抗生物質は病気のた

めではなく、早く成長して太らせる目的だ。屠殺までの所要時間は、利益を上げるためには最重要課題である。受胎から屠殺、スーパーへの配送と、すべての運営は垂直統合されている。

奇しくもメキシコ・グランハスキャロル社 (GCM) は、そのような豚用のファクトリー・ファーム強制収容施設であり、2008年には、およそ百万頭 (同社の統計では 95 万頭) の豚を生産した。GCM は合弁企業で、その 50% が世界最大の豚「製造」会社であるバージニア州のスミスフィールド・フーズ社によって所有されている。(参照) スミスフィールド・フーズ社のウェブサイト http://www.smithfieldfoods.com/our_company/our_family/Norson.aspx 豚は、NAFTA(北米自由貿易協定) の加盟国であるメキシコの小さな田舎町で育ち、スミスフィールド・グループのラベルを付けられ、国境を越えて主に米国のスーパーへと運ばれていく。米国の消費者のほとんどは、どんな場所で豚が育てられたのか知らない。

ここから話は興味深くなってくる。

こえだ 肥溜めと遊び場

ロンドンのタイムズ紙は、スミスフィールド・フーズ社の巨大な豚製造工場のあるベラクルズ州ラグロリアに住む少年エドガー・ヘルナンデスの母親にインタビューした。現地の記者の報告によると、

エドガーは、犬やヤギに混じって街を走り回って遊んでいる。数週間前に豚インフルに感染したことは気にしていないようだ。第一号の症例となったエドガーはメキシコの国全体を停止させ、世界中を厳戒体制にした。「最高に元気だよ！」と 5 歳の少年は言った。「でも、しばらく頭が痛くて、のどがガラガラ、熱もあったよ。ベッドに横になるしかなかった」エドガーが豚インフルの被害者第一号であることが確認されたのは月曜日 (注: 2009 年 4 月 27 日) だった。この発覚によって、ラグロリアと周辺の養豚工場、そして肥溜めは、一躍、死の新型豚インフルエンザ・ウィルスの発生源を探求する世界レースの中心地となった。

(引用元) ラグロリアの Ruth Maclean 記者とメキシコシティの Chris Ayres 記者「頭が痛くて熱が出た、生き延びた少年が語る」ロンドン、タイムズ紙 2009 年 4 月 28 日。

これは非常に興味深い。「ラグロリアと周辺の養豚工場、そして肥溜め」と言っている。おそらくスミスフィールド・フーズのラグロリア養豚工場の周りがある肥溜めとは、毎年工場生産される少なくとも 95 万頭の豚の糞尿が投げ捨てられる場所のことだろう。スミスフィールドのメキシコの合弁会社ノーソン (Norson) は、自社だけで毎日 2,300 頭の豚を屠殺していると述べている。かなりの数だ。これを参考にすれば、ラグロリアの豚強制収容所でどれだけの量の排泄物がでるか察しがつく。

重要なことに、タイムズ紙の記者によると、

ラグロリアの住民は、3 月からグランハスキャロル社の豚の排泄物の臭気で深刻な呼吸器感染に悩まされていた。住民たちは今月デモを行い、豚に×マークをつけ「危険」と書かれた看板を持っ

て行進した。(引用元 前出のタイムズ紙)

肺炎で死亡した子供たちの遺体を掘り起こして検査してほしいという要請がなされていた。ベラクルズ州の議会は、スミスフィールドのグランハスキャロルに対し、廃棄物処理の実態について書類を提出するように要求したが、スミスフィールド・フーズは「噂には回答できない」と言って何度も住民の要請に関するコメントを拒否した。(引用元 前出のタイムズ紙)

エド・ハリスの調査資料によると、

住民によれば、同社は感染発生の責任を否定し、インフルエンザのせいにした。しかし、自治体の衛生当局は仮調査の結果、病原の媒介は豚の排泄物にたかるハエの一種であり、感染発生は養豚場と関係していることを示唆している。

(引用元) エド・ハリス (Ed Harris)、「メキシコの豚インフルエンザ発生における環境の意義をブローガーたちが検証」2009年4月27日 <http://www.planethoughts.org/?pg=pt/Whole&qid=2870>

ということは、豚インフルエンザの恐怖というストーリー全体が、世界最大の豚製造工場を経営するスミスフィールド・フーズ社の広報・情報操作専門家から生み出されたのではなかろうか。

ベラクルズの新聞ラマルシャ (La Marcha) は、スミスフィールドのグランハスキャロルが豚製造から出る大量の廃棄物を適切に処理しなかったことを強調し、感染発生の責任を問うている。(同上、エド・ハリス)

理解できなくもないが、同社は予想外に注目を集めてしまっていて正直驚いているところではなかろうか。この会社は、マクドナルドやサブウェイといったファーストフード・チェーンに納品しているが、1997年に米国で水質汚染防止法に違反して1,230万ドルの罰金を課せられている。おそらく遠く離れたメキシコの田舎で、水質汚染防止法の違反を指摘される心配もなく、比較的ゆるい規制の雰囲気を楽しんでいたのだろう。

毒物濃縮場としてのファクトリー・ファーム

どんなに控え目に言っても、巨大アグリビジネス企業が、メキシコのベラクルズのような第三世界に設備を移す動機は、最終的に食料品としてより安全で健康に良い品質へと改善するためではなく、コスト削減や、安全・衛生面での査察^{ささつ}がないことである。グランハスキャロルのような大規模屋内型の家畜工場が有毒病原菌の最悪の培養場となっていることは、米国議会の報告にも取り上げられ、広く文書化されている。

ジョーンズ・ホプキンス公衆衛生大学院の協力で米国のピュー基金が最近出した報告によると、

米国における食用動物の生産方法は、家族経営の中小規模の農場による広い土地を使ったシステムから、巨大な規模で経営される集中システムへと変化した。伝統的な家畜小屋というよりは、工場に似た建物に大量の動物たちが閉じ込められている。この変化は、基本的に消費者の目の届

かないところで起きているが、環境に与えるコストとして表面化し、人々の健康、地域社会、さらには動物たち自身の健康と生活に悪い影響をもたらしている。



ファクトリーファームの豚製造は、代表的な病気・毒の発生源であるが、あまり注目されない

さらに言及して、

40年前に存在していた、多様で独立していて、さまざまな穀物と数種類の家畜を育てていた家族経営の農場は、経済主体としては消滅しつつあり、より大きな、そして、しばしば高い利益を狙った投資で経営されているファーム・ファクトリーに取って替えられている。これらファームが生産する動物たちの多くは、最初に生まれた時から、加工工場に輸送され市場へと出荷される最後まで、ずっと食肉加工会社によって所有されている。

また、家畜の排泄物について強調している。

未処理の動物の排泄物を畑にまけば、過剰な栄養投入となり、表層水を汚染し、バクテリアを刺激して藻類の増殖につながり、ひいては水中の溶存酸素濃度の低下をもたらす可能性がある。

(引用元) 工業的家畜生産に関するビュー委員会、「肉を食卓へ:アメリカの工業化された家畜生産」
http://www.ncifap.org/_images/PCIFAPFin.pdf

ベラクルズ州ペロテ町の養豚場のようなアグリビジネス化した養豚工場が健康・衛生的に危険な状態であることを考えれば、これこそが本来、最初に調査されるべきポイントである。マスコミは、何となくインフルエンザ（または豚インフルエンザ）らしき症状にたまたま遭遇した人のことを報道してパニックで儲けるようなことをしているし、WHO や CDC のような権威筋も今日

に至るまで、合理的な科学的調査に辿り着くにはほど遠い発表しか行っていない。

タミズフェルド国防長官とタミフルエンザ

2005年10月、国防総省は世界中の米軍全員に鳥インフルエンザ H5N1 に対するワクチン接種を命令した。世界のマスコミは恐ろしい報道であふれた。そして、ドナルド・ラムズフェルド国防長官は、「タミフル」という名前で販売された「オセルタミビル」という薬を備蓄するために10億ドル以上を予算措置したと発表した。ブッシュ大統領は議会に対し、更にタミフルを備蓄するため、20億ドルを追加で割り当てるよう要求した。

このときラムズフェルドは、巨大な利権の対立が存在することを報告し忘れた。ラムズフェルドは、2001年1月にワシントンに来るまで、カリフォルニアの製薬会社ギリアドサイエンス社の会長だった。ギリアドサイエンス社は、自らが開発したタミフルについて世界的に特許を独占しており、その世界販売権はスイスの製薬大手ロシュ社に販売している。ロシュのタミフル販売額の10%を獲得するギリアドサイエンス社の最大株主がラムズフェルドであると報じられた。(参照) ウィリアム・イングドール、「鳥インフルエンザ? またペンタゴンの悪ふざけか?」グローバルリサーチ、2005年10月30日) この情報が漏れたとき、国防総省は「ラムズフェルド長官は、ギリアド株を売却せず、保有し続けることにした。もし売却すれば何か隠しているのではと思われるから」と素っ気無いコメントを出した。この苦渋の決断によって、ギリアド株は一週間で700%以上も急上昇し、ラムズフェルドは何百万ドルも儲けたと言われる。

タミフルは、気軽に服用してよい甘いキャンディーではない。深刻な副作用がある。人間の呼吸に対して致命的な作用を及ぼす可能性のある物質を含んでおり、報道されたところによれば、吐き気や眩暈、その他インフルエンザのような症状を起こす。

豚インフルエンザ・パニックの発生以来（インフルエンザの発生ではなく、あくまでパニックの発生である）、タミフルの売上は、インフルエンザ関連商品としてマーケティングされている他の品々と同様、爆発的に増加した。ウォール街は、ギリアド社の「買い」^{すいしょう}推奨に突進した。「一発打ってくれよ、何でもいいから、死にたくねーよ」

ブッシュ政権は、パニックと死の恐怖を巧妙に利用して、鳥インフルエンザ詐欺を展開した。不気味なことに現在の豚インフルエンザでも同じことが繰り返されているが、鳥インフルエンザの発生源を^{たど}辿ると、世界中に鶏肉を出荷しているタイなどのアジアの巨大な養鶏工場に行き着いた。これらの養鶏「工場」の衛生状態を真剣に調査することなく、ブッシュ政権とWHOは、小規模な家族経営の養鶏場の「自由に放し飼いでいる鶏」を非難した。これによって、もっとも衛生的で自然な状態で飼育されていた養鶏農家は経済的に壊滅的な打撃を受けた。アーカンソー州のタイソンフーズとタイのCGグループは終始、銀行に笑顔をふりまいていたと伝えられてい

る。

さて、オバマ政権が同じシナリオで豚インフルエンザの恐怖を利用するのか、今後注視する必要がある。今回は、空を飛ぶ鶏の代わりに、「空を飛ぶ豚」だ。すでにメキシコ当局は、いわゆる豚インフルエンザで死亡したのは7人であり、マスコミが言いふらしているような150人以上ではなく、その他の感染の疑いがある人については大半が通常のインフルエンザであると伝えている。

(第2部に続く)

元記事 Flying Pigs, Tamiflu and Factory Farms

by F. William Engdahl (URL <http://www.engdahl.oilgeopolitics.net/>)

Global Research, April 29, 2009

<http://www.globalresearch.ca/index.php?context=va&aid=13408>

© F. William Engdahl, Global Research, 2009

この記事は、著者F・ウィリアム・イングドール氏のご好意により日本語訳と公開の許可を頂いたものです。
This is the translation of the article by the author F.William Engdahl and presented to the public owing to his kindness.